

『2019年度広島教区テーマ 「仕える使命（王職）」』

（大人の教会学校 2019年6月）

イエスは、わたしたちのために、命を捨ててくださいました。そのことによって、わたしたちは愛を知りました。だから、わたしたちも兄弟のために命を捨てるべきです。《ヨハネの手紙一 3:16》

キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり・・・へりくだって、死にいたるまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。《フィリピの信徒への手紙2:6～8》

◇◇◇

「カルボナード火山島が、いま爆発したら、この気候を変えるくらいの炭酸瓦斯を噴くのでしょうか」

「それは僕も計算した。あれがいま爆発すれば・・・地球全体を平均で五度くらい温かにするだろう」

「先生、あれを今すぐ噴かせられないでしょうか」

「それはできるだろう。けれども、その仕事に行ったもののうち、最後の一人はどうしても逃げられないのでね」

「先生、私にそれをやらしてください・・・」

《「グスコブドリの伝記」 宮沢賢治》

◇◇◇

「熊、おれはてまえを憎くて殺したのでねえんだぞ。おれも商売ならてめえも射たなけあならねえ。ほかの罪のねえ仕事をしてえんだが畑はなし、木はお上のものにきまったし、里に出ても誰も相手にしねえ。仕方なしに獵師なんぞするんだ。てめえも熊に生れたが因果なら、おれもこんな商売が因果だ。やい。この次には熊なんぞに生まれなよ」

.....

小十郎は、があんと頭が鳴って、まわりいちめんまっ青になった。・・・

「おお小十郎、お前を殺すつもりはなかった」

もうおれは死んだ、と小十郎は思った。そして、ちらちらちらち青い星のような光が、そこいちめんに見えた。

「これが死んだしるしだ。死ぬとき見る火だ。熊ども、ゆるせよ」と小十郎は思った。

とにかくそれから三日目の晩だった。・・・

その栗の木と白い雪の峰々にかこまれた山の上の平に、黒い大きなものがたくさん輪になって集まって、おのおの黒い影を置き回々（ふいふい）教徒の祈るときのように、じっと雪にひれふしたままいつまでも動かなかった。そしてその雪と月のあかりで見

ると、いちばん高いところに小十郎の死骸が半分座ったように置かれていた。

-- 《「なめとこ山の熊」 宮沢賢治》